

ワイルドの劇作術

—「ヴェラ、或は虚無主義者達」を通して

五 島 正 一 郎

(1)

オスカー・ワイルド (1854~1900) はアイルランド生れの詩人、小説家、劇作家、唯美主義者で、「幸福な王子」「わがままな巨人」などに代表される童話、「ドリアングレイの肖像」という長編小説、「インテンションズ」に表わされている芸術論、「レディング牢獄の物語詩」等、芸術至上主義を旗印として幅広く、多方面にわたって活躍した才人である。我が国に於いても唯美主義者としてのワイルドについては古くから知られているが、劇作家としてのワイルドの評価はかなり低いように思われる。しかし、イギリスに於いてはワイルドの喜劇、特に「真面目が大事」(1895)はよく上演されるし、ウィリアム・ウィッチャリー、サー・ジョン・ヴァンブルー、サー・ジョージ・エセレージ、ウィリアム・コングリーヴ、リチャード、シェリダンという才人達が培ってきた伝統的なコメディ・オブ・マナーズ(風習喜劇)の流れを継承し、ノエル・カワード、テランス・ラティガンへの橋渡しを立派に行っている。余談になるが、「真面目が大事」については文芸レコードがエンジェル、キャデモン二社から現在でも出されていることから考えても、かなりの評価が与えられていると見なすことができる。ワイルドが悲劇を書いた頃は劇作家としての評価は低く、「サロメ」(1891)が初めて脚光を浴びたのも1896年2月パリに於いてであった。この「サロメ」は10年程前に三島由紀夫の主宰していた浪曼劇場が上演したことがあるが、この作以外の悲劇は日本に限らず英米の批評家達もあまり問題としていない。大した評価も受けない悲劇を書いた作家が喜劇で不死鳥のように甦ったのはどこに理由があるのか。それを知る意味で、最初の悲劇、「ヴェラ、或は虚無主義

者達」を取り上げて、テキストを中心に調べることにする。

(2)

「ヴェラ、或は虚無主義者達」が書かれた頃、ロシアでは革命運動が隆盛を極め、1870年から1880年にかけて虚無主義が当時の新聞紙上を大いに賑わしていた。1880年の秋、ワイルドはこの作品の上演台本を作り、エレン・テリーを含む当時の有名な女優に台本を送り、誰かがやりたいと名乗り出るのを心待ちにしていた。しかし、この時は実質的には誰も興味を示さなかった。結局、1881年12月、アデルフィ劇場で、バーナード・ピアレという当時有望視されていた女優がヴェラの役をやることに決った。折角決ったのに、⁽²⁾ どういう訳かこのロンドン公演は突如として3週間前に中止となった。この理由は、ワイルドが配役に不満を持ち、経営者側との折り合いがつかず作品を引っ込めたのだと言われているが、実際のところは、1881年3月13日にロシア皇帝アレキサンダーⅡ世が暗殺された事件がからんでいると言われている。と言うのは、イギリスとロシアとが姻戚関係にあったという政治的状況がその公演を中止に迫りやっただと考えられる。「ヴェラ」の内容と現実の事件の類似性を考える時、上演されていれば当然話題性に富んだ、ドラマチックなものになっていたかもしれない。ワイルドの最初の劇、「ヴェラ、或は虚無主義者達」は出だしからついていなかった。言い換えれば、ワイルドの劇作家としての出だしもあまり芳しいとは言えない。しかし、時代を先取りして、それを劇化した才能は一考に価するように思う。皇帝、アレキサンダーⅡ世の暗殺事件の2年後、1883年8月20日、ニューヨークのユニオン・スクエア劇場で初めて上演されたが、僅か一週間の公演で、殆んどどの新聞の劇評も手厳しいものだった。⁽³⁾

(3)

アメリカのニュー・ヨーク公演が散々な目に会ったのは、皇帝、アレキサンダーⅡ世の暗殺事件の話題性がなくなり、「ヴェラ、或は虚無主義者達」という劇の良否そのものが問題となったからであろう。また、唯美主義者、

ワイルドの劇であるというセンセーショナルな話題をもってしても、1週間の公演で中止せざるを得なかったのは、ワイルドの劇作術がまだ完成の域に達せず、習作時代にあったからに他ならない。

劇の主軸になる物語は、政治的なものとロマンチックなものを取り扱われている。劇の構成は序幕で始まり、あとに四幕が続く。劇の流れを知る意味で、一応の荒筋を述べることにする。

<プロローグ>

ピーター・サブウロフはロシアの自分の宿屋で、若い農夫、ミカエル・ストロガノフに、息子、ドミトリが法律の勉強にモスクワへ行ってしまい、半年近くも家に便りを寄さないと嘆いている。シベリアへ行く途中の政治犯の一人が、コテムキン大佐率いる護衛兵によって連れてこられる。大佐は囚人にパンと水を与えるように命令し、自分にはちゃんとした食事と飲物を出すよう要求する。大佐が別の部屋で食事をしている間、サブウロフの娘、ヴェラは、鎖で縛られた囚人にどんな罪を犯したのかと尋ねる。顔を隠そうとしている一人の囚人が、皇帝の圧制から自由を勝ち取ろうとしたからだと答える。彼女は那个男が兄、ドミトリであることを知り、彼の為に復讐を誓う。

<一幕>

5年後、モスクワ、チェルナワヤ街、99番地に、仮面をかぶった共謀者達が集まっている。ピーター・ツェルナヴィッチをリーダーとし、彼らは革命の誓いを口誦し、仮面を取る。彼らの中には、ミカエル・ストロガノフが見える。彼らの運動の指導者的役割を果たすようになっているヴェラは、宮廷の仮面舞踏会に出かけたときミカエルは同志に伝える。そうこうしているうちに、ヴェラが審理なしで市民が逮捕され、罰せられることになる戒厳令が翌日発布されるという知らせを持って登場する。共謀者達にはその機先を制する時間は12時間しかない。

リーダーとミカエル・ストロガノフが舞台の一隅に引き、相談をしている間、ヴェラはアレクシス・イワナシェヴィッチという若い医学生に気付く。

アレクシスは自分がいかに人民を愛しているかということを熱っぽくヴェラに語る。彼は戒厳令の布告を皇帝に撤回するよう直訴すると断言する。暫くして、満座の中で、彼はスパイだとミカエル・ストロガノフに告発される。ミカエルが前回の会合の後、アレクシスの後をつけた所、彼が宮殿に入るのを見届けたのだと暴露する。

共謀者達はアレクシスを殺せとそれぞれナイフを抜く。ヴェラはミカエルの言ったことを否定するようにアレクシスに頼むが、彼はミカエルの言ったことを認めるが、スパイではないと主張する。共謀者達はアレクシスを殺そうとするが、ヴェラは身体を張って彼をかばう。その際に、彼を殺すならまず自分を殺してからしろとまで啖呵を切る。彼らがためらっている時、外で声がする。彼らは慌てて仮面をつける。今や將軍になったコテムキンが部下を率いて登場する。ヴェラは新しい悲劇のリハーサルをやっている旅芸人の一座だと釈明する。コテムキン將軍は彼女に仮面を取るように命ずる。この時、アレクシスは將軍にさがるように命じ、自分の仮面を取り、身分を明らかにする。將軍は皇太子を見て、一瞬ひるむ。一方、共謀者達は一卷の終りだと思う。しかし、アレクシスの口から出た言葉は、ヴェラの口裏を合せたものであった。ロマンチックな冒険を求めて町を歩いている時、偶然、この芸人達に会ったのだと説明する。コテムキン將軍はアレクシスによって、今夜のことは他言無用だと釘をさされ、ヴェラのことを心にかけながら、部下と共に引き上げる。共謀者達は皇太子によって救われたことになる。

<二幕>

翌日、宮殿では、皇太子以下閣僚が閣議を始めるため、皇帝の到着を今や遅しと待っている。皇帝が現れるまでの間、彼らはかなり辛辣な口論に耽っている。中でもパウル・マラロフスキイ首相のウィットに富んだ話しは一段と群を抜いている。その言葉は鋭く、他の者達の心に深く突きささる。

皇帝の心に毒を吹き込み、暴君にしてしまった悪魔だと皇太子がパウル首相を激しく批難しても、首相はロシアで最も憎まれる人物になるのは楽しみ

であると平然として答える。皇帝は警護に守られて登場し、パウル首相以外は皆敵ではないかと疑う。自分の息子である皇太子にまで疑いの目を向ける。皇太子はヴェラに約束した通り、人民に慈悲を与え、法律の厳しさや不正を正すように申し入れをする。パウル首相は皇帝が戒厳令の布告にサインさえすれば、ロシア全土の虚無主義者達を根絶やしにすると進言する。これを耳にした皇太子は一層激しく、公然と批難し、ついには、自分も虚無主義者だと告白してしまう。皇帝は皇太子の逮捕を命じ、人民との宣戦布告をする。その後、皇帝は大股でバルコニーへ進み、窓を開ける。銃声がして、皇帝がよろめきながら倒れ、死ぬ。

<三幕>

三日後、虚無主義者達は思いがけない訪問者、パウル元首相を迎える。皇太子、アレクシスは皇帝となり、悪の天才パウルをパリへ国外追放したことが明らかになる。彼は革命をバックアップすることで、権力を取り戻せたらと願う。ミカエル・ストロガノフが登場し、皇帝を暗殺した英雄として、歓呼の声で迎えられる。共謀者達は会議をするが、彼らの中には勿論アレクシスの姿は見えない。しかし、ヴェラは彼の到着を今か今かと待っている。ところが、革命の規約第7項には「虚無主義者は、その同輩以上に王冠を戴く全ての者に対して、死を賭して戦うべし」と明記してある。従って、アレクシスはこの夜死の宣告を受ける。ヴェラだけがアレクシスの弁護をし、彼の為に嘆願するが、裏切者呼ばわりされる。ミカエルは鎖に繋がれた兄、ドミトリの話を持ち出し、ヴェラを説得する。ミカエルの説得で、彼女はアレクシスへの思いを断ち切る。暗殺者を決めるくじが引かれ、彼女にそれが当たる。

ヴェラに宮殿の図面と私用のドアの鍵が渡される。彼女は剣か毒薬の選択を迫られ、短剣を取る。他の共謀者達は宮殿の外で待ち、真夜中の時刻を合図に、うまくいった証拠として、血にまみれた短剣を彼らに投げることを打ち合わせる。失敗した場合は、彼女が捕ったと解釈し、彼女を救うと同時に

に、皇帝を殺害する手筈を整える。ヴェラは勇気を奮い起こし、己れを叱咤激励する。

＜四幕＞

その晩、皇帝の大臣達は彼らの財産や権利にうるさく干渉する皇帝の自由主義を嘆いている。皇帝は彼のやり方を手ひどく批難しているのをたまたま耳にする。彼は即座に大臣全員を国外退去にする。一人取り残され、欲しくもない王冠を冠らなければならないジレンマに悩む。衛兵の大佐が命令を聞きに登場する。皇帝は普段のような非常警戒の必要はないと言う。皇帝の父君も供を連れずに休むという無謀なことはしなかったと近臣も進言するが、追い払われる。その後、ヴェラに会いに忍びで町に行く決心をする。しかし、すぐにその必要がなくなることがわかる。近臣達もいなくなり、皇帝が横になってまどろんでいると、ヴェラが現れる。マントを着て、短剣を持っている。皇帝が目覚めると、彼女はやにわに短剣を振り上げ、攻撃しようとする。皇帝は短剣などには目もくれず、愛情を持って人民を治めること、ドミトリを釈放したこと、彼女に妃になって欲しいことなどを熱心に語る。ヴェラは短剣を握りしめて、自分の役目を果そうとするが、出来ない。時計が12時の時を告げる。ヴェラは通りからの仲間の声を聞くやいなや、皇帝から離れ、我が身を短剣で刺す。皇帝は彼女の短剣を取り上げ、彼女と一緒に死のうとする。しかし、ヴェラは皇帝に国の為に生きてくれるように懇願する。短剣を取り返すや、それを窓から投げ、共謀者達に彼女の役目が成功したと信じ込ませる。ヴェラはその後、ロシアを救ったのだと言って、息を引き取る。

(4)

劇の概略からもわかるごとく、劇そのものが長い上に、虚無主義という政治的なものと男女の恋という相容れない二つの大きなテーマが劇全体を構成している。つまり、政治的な要素とロマンチックな要素が第一幕から同時進行し、いずれにも焦点が絞れぬまま最後まで中途半端な状態で終わっている。

これは作者、ワイルドの状況設定の明らかな失敗である。男女の恋というロマンチックな面を考えてみても、一応、型の上ではアレクシスとヴェラの悲恋物語となっているが、実際には、「ロミオとジュリエット」の場合のようなカタルシスを引き起すまでの力はない。この理由はいろいろ考えられるが、まず第一に考えられることは虚無主義者の女闘士とロシアの皇太子との関係である。ここには、テラン・ラティガンの「王子と踊り子」のような男と女の関係は希薄である。虚無主義者であることは、ロシア皇帝の専制主義と対立関係にあり、当然、皇太子アレクシスとも敵対関係にあると考えるのが普通である。しかるに、ヴェラとアレクシスの関係はこういった関係を無視した型で第一幕から始まっている。確かに医学生として共謀者の仲間として劇中で紹介されているが、説得力があるとは思えない。更に決定的なことは、プロローグの最後のヴェラの誓い、「自分の中のどんな性質も殺す、愛もしない、愛されもしない、憐れもしない、憐れまれもしない、結婚もしない」という虚無主義者であるがための厳しい条件が劇の終りまでついてまわり、アレクシスとの恋へ走る足枷となっていることである。これは政治的なテーマを強めることはあっても、男と女関係を押し進めることはない。第一幕で戒厳令の知らせを持って来たヴェラはアレクシスについて、「こんな恋人を持てるのも自由の恵みね」と云ったそばから、「わたしは性質を殺し、愛することも愛されることもしないと誓ってなかったら、わたしはあの人を愛してしまったかもしれないだろう」と自らにブレーキをかけている。これでは男と女の求め合う心の高まりを期待することは不可能である。また、第二幕が皇帝の宮殿の会議室での出来事に終始し、ヴェラとアレクシスの話題が長い間無視されていることも男と女関係を盛り上げないでいる大きな要因となっている。第三幕でもアレクシスが来るのを心待ちにしているヴェラが彼の弁護をするが、結局はミカエルに言い負かされて、幕切れに「どんな性質がわたしにあっても殺し……」を口にし、復讐の誓いを新たにす。しかし、第四幕において、アレクシスの愛の告白に圧倒され、

「どんな性質がわたしにあっても殺し……」の誓いを破り、ヴェラは女にもどる。最後の幕だけから判断すれば、愛のために同志を裏切る女闘士と王位も投げ捨てる皇帝という恋の成就を思わせるが、全体の流れから考えるとかなり唐突な感じを観客に与えるのは否めない。第一幕での若い医学生、アレクシスとヴェラとの対話からは恋している男女の会話は見つからず、話の内容は虚無主義者としてのものである。アレクシスがヴェラへの気持を吐露している台詞は、「あなたが死んだら、僕はすべての希望が失くなってしまう」という箇所だけである。これも他の台詞が虚無主義者の立場を強調するものばかりなので、うっかりすると虚無主義者の希望の星の意味に誤解されかねない。一方、ヴェラの方も前に述べた虚無主義者の誓いという束縛を受け、「若死にすることはない」「もう二度と来るんじゃない」と思いやりとも忠告もとる言葉を述べるにとどまっている。アレクシスがスパイ呼ばわりされた時も、身体を張ってかばってはいるが、リーダーが言っているようにヴェラの「気まぐれ」か、或は、好意ぐらいにしか考えられない。身体を張るという動きから見ると、ヴェラのアレクシスに対する気持が容易ならざるものであるという印象を与えるが、その所作に伴う、或はその所作を裏打ちする台詞が殆んどないために、男女のお互いに引かれ合う気持を引き出すまでにいたっていない。第三幕では、ヴェラとアレクシスの対話はなく、アレクシスを待ち焦れるヴェラの台詞から彼女の気持を推し量るより他に手立てはない。時計が6時を打ち、アレクシスが裏切者にされた時のヴェラは、彼のことをいろいろ弁護する。しかし、第一幕での二人の絡みの印象が薄い事と、第二幕で二人が登場せず、宮廷に焦点を合せ、かなり長い時間的経過がある事などによって、ヴェラだけの一方的な台詞から二人の関係が親密な状態になっていると想像するのはかなり無理がある。ヴェラの話に業をにやしたミカエルは、ついに「君はあの男を愛している」とか「恋人の為に自由を、情夫の為に人民を裏切るのか！」と批難し、彼女に虚無主義者の誓い、「どんな性質がわたしにあっても殺し……」を思い出させ、兄、ドミトリヤ

父親の話で彼女の気持を大きくゆさぶる。ここにいたって、ヴェラは完全に虚無主義者の女闘士に戻る。虚無主義者に戻ることはアレクシスに対する恋情を捨て去るか、自分の心の中に押し込めたことを意味するが、アレクシスを捨て切った場合、第四幕で彼を殺せず、二人の気持が燃え上がるという結末のつけ方はいかにも不自然である。また、心の中に押し込めたとする場合でも、最後の結末まで一気に持っていくのは説得力が欠ける。いずれにしても、二人の個々の心理の描き方の不足、二人の絡み合う場面の少ないこと、言い換えれば、ヴェラとアレクシスの平面的な性格描写が男女の関係を浮き彫りにすることを阻み、これがこの劇の最大の欠陥となっているとも言える。

政治的テーマとなっている虚無主義者達の革命達成は序幕から第四幕までを通してみると一応の成果を収めている。序幕での虚無主義者の囚人の登場、その後のヴェラの復讐の誓い。第一幕での虚無主義者達の会合。第二幕での皇帝の登場から死まで。第四幕のヴェラの死。この流れを大ざっぱに考えてみると、序幕、第一幕、第三幕は革命の共謀者達を中心にすえて展開させていることがわかる。序幕の出来は良しとしても、第一幕のコテムキン將軍の登場、第三幕のパウル・マラロフスキイの登場を除けば、虚無主義者達だけの台詞で革命まで引き起さなければならなかった状況、必然性を描き出すことになるので、どうしても抽象的となり、曖昧さを生ずることになる。他方、第二幕の皇帝の登場までの大臣達の会話は為政者の宮廷生活を虚無主義者達と対照的に提示しているだけで、劇の流れとはあまり関係ないお喋りに終始している。これは筋から外れるために観客を飽きさせ、劇の緊張感を奪い去り、劇そのものを冗漫にする要素となる。これと同じことは第四幕での皇帝の登場までの会話にも見られる。こういった脱線は、この劇の主要人物が頻繁に用いる比喩、誇張した、大げさな表現と相まって、劇全体の遊びを多くし過ぎて、その結果、真実味を薄めてしまっている。更に、既に述べたごとく、もう一つのテーマである男と女のメロドラマを完結させるため

に、突然、ヴェラを裏切者に仕立て上げている事実も、政治的なテーマの焦点をばかしている要因となっていることは言うまでもない。したがって、作者、ワイルドが書簡集、148—149で明らかにしているような「自由と愛を求める民衆の熱情」は、残念なことに作者の意図ほど巧みに表現されていない。

ヴェラとアレクシスの平面的描写が劇の流れの上から見て、欠点となっていることは前にも触れたが、パウル・マラロフスキイに関してもこのことが言える。劇の展開上やもうえない処置なのかもしれないが、パウル・マラロフスキイの登場する第二幕と第三幕を比較すると、皮肉、警句、機智に溢れ、冷酷無比な、生き生きとした、興味深い人物が、第三幕になると、台詞の減少と共に精彩を欠き、舌鋒に鋭さが失くなり、第二幕とは別人のようにになっている。つまり、折角大きく描かれていた人物が、ここに来て途端に縮少し、つまらなくなっていることを示している。同様に、ミカエルも描きこまれていない登場人物の一人であると言える。序幕におけるヴェラとミカエルとの関係を考えてみると、二人の関係がある程度の展開を見せるのではないかという期待を抱かせるが、第一幕、第三幕におけるミカエルは終始虚無主義者の役割を果たすばかりで、アレクシスに対する憎悪も嫉妬も感ぜられず、ヴェラを奪い取ろうとする様子も、張り合っている気配もない。アレクシスをスパイ呼ばわりする場面も、ヴェラを説得して元の女闘士に立ち返えさせる場面も、虚無主義者の立場を一層強烈にするだけである。本来ならば、敵役として一番最適である筈のミカエルが敵役の任を十分に果していないので、メロドラマの展開の媒体にならず、劇そのものを底の浅いものになっている。その他、虚無主義者達の憎悪的になっている皇帝が第二幕だけに登場し、虚無主義者達が述べている人物像を裏付ける働きをしていないことが挙げられる。極悪非道とおぼしき行為は自分の息子を銃殺にしまえという場面であるが、残酷な皇帝というよりは、むしろ愚かな皇帝というイメージが先に立つ。要するに、虚無主義者達の台詞から生み出された単なる専

制君主で、表面的に描かれているに過ぎない。このように劇の主要人物の描写の仕方が甘いため、それぞれの人物の性格にふくらみが出ず、結局、劇全体を薄っぺらな、中途半端なものにしている。しかしながら、今迄述べて来たヴェラに関するワイルドの劇作術の欠点のために、彼の劇作家としての名声に傷がつく訳でもない。逆に、喜劇の面では大いに生かされていることが多々あるように思える。

さて、彼の劇作術の中で感心させられるものはいくつかあるが、その中でも特に注意を引かれるのはパウル・マラロフスキイである。皇太子、アレクシスの言葉を借りれば、「悪魔」ということになるが、これは状況設定の上での悪魔に過ぎず、彼の言動には悪魔というよりお喋り好きの興味深い人物としての性格も兼ね備えている。極端な言い方をすれば、唯一人の喜劇的人物と言えるかもしれない。彼は皮肉、あてこすり、警句、ウィットに富んだ台詞を縦横に駆使し、時には相手を打ちのめし、また、時にはさりげなく相手をけむに巻いて知らん顔をしている。第二幕の初めで、ペトロ公に向かって「喋べらないというのは全く疲れる」と答えているのでもわかるように、確かに話すことを楽しんでいるのが随所に見られる。彼の台詞には嫌味とか逆説的な言い回しは見られても、皇帝、皇太子、ヴェラ、ミカエル等の長台詞に織り込まれている大仰で、誇張した表現は見あたらない。警句やウィットに溢れた台詞はパウル・マラロフスキイの知性を感じさせると同時に、短い台詞を立て板に水の如くポンポン出すことによって、話にテンポを付け、会話を軽妙に運んで行く効果を作り出している。この点にこそ、後年の四つの喜劇、「ウイグミア卿夫人の扇」「つまらない女」「理想の夫」「真面目が大切」の台詞回しの基礎があるように思う。ひいては、これらの喜劇の特徴、或は、ワイルドの一つの特質と見なされている逆説やウィットは、ノエル・カワード、サマセット・モームへと続く客間劇の源泉であると言える。

次に心引かれることは登場人物の思いがけない処理の仕方によって劇的效果をあげていることである。序幕で囚人を護送中のコテムキン大佐が第一幕

の終りに再び将軍として虚無主義者達の秘密の会合に現れ、序幕との関連性をはっきりさせている。コテムキンが大佐から将軍に昇進していることで時間的経過を示し、虚無主義者の革命運動が激しくなっていることを具体的に表している。また、更に、虚無主義者だけでなく、主役のヴェラも逮捕されるのではないかというサスペンスを盛り込むのにも成功している。皇太子、アレクシスは医学生の虚無主義者として登場するが、コテムキン将軍と会い、仮面を取って皇太子であることを観客ばかりでなく、舞台上の虚無主義者達に知らせる。この行為は一瞬虚無主義者達が逮捕されるという緊迫感を生むが、ヴェラと口裏を合せることでスパイの嫌疑をはらし、虚無主義者達を救うと同時に、第二幕へと展開していく足掛りを作っている。

第二幕の終り近くで、皇帝が自分の息子である皇太子、アレクシスを逮捕させて、銃殺刑にせよと命ずる場面があるが、この直ぐ後で皇帝が撃たれて死ぬ。この皇帝の死の伏線は既に第一幕のミカエルの台詞、「近衛兵の服を着るし、当番の大佐は同志の一人ですよ。忘れたんですか、一階です。だから十分狙撃出来ますよ。」にあり、その結末をつけている。この結末のつけ方は、銃殺刑を言い渡されていた皇太子、アレクシスの命を救うことになり、第三幕のヴェラの心の動揺、第四幕の大団円への起爆剤となっている。

第三幕の初めから、バウル・マラロフスキが虚無主義者達の会合に来て、同志として認められることは如何にも不条理なことである。アレクシスをして悪魔と呼ばせ虚無主義者達を根絶するため戒厳令を布告させようとした張本人が、新しい皇帝、アレクシスに追放されたとは言え、百八十度転回して仲間になってしまうのはどうしても不自然である。しかし、為政者の中から最も不自然な人物を選んだことは、作者、ワイルドが予期せぬ劇的效果を観客に与えることを意図したのではないかと思われる。確かに、この劇の中では必ずしも良い結果を上げたとは言いかねるが、不条理なものを平気で持ち込み、試している創作態度は考慮すべき点ではないかと思う。この幕でのもう一つの思いがけない人物処理は、前半で皇帝になったアレクシスに好

意を示し、彼のことを弁護していたヴェラが、ミカエルの説得で翻意したばかりか、この翻意を踏み台にして、皇帝殺害のくじが彼女に当たるように作り上げていることである。この処理の仕方によって、一応、第四幕での皇帝、アレクシスとの絡み合いが自然なものとなる。

最後の幕では、皇帝を殺そうとするが果せず、自分の命を絶つことで彼を救おうとする。この結末のつけ方は劇そのものをセンチメンタルなメロドラマにしているが、作者の最初からの意図である男と女の劇であることを決定づけ、政治劇になるのを避けている。

最後に、幕の使い方を簡単に取り上げてみることにする。当然、場面展開の処理の仕方と重複する箇所が含まれるので、くどくなるかもしれないが進めてみることにする。序幕では、モスクワに行っている筈のドミトリが囚人となってヴェラと再会する。彼女は兄の敵をとることを誓い、幕となる。ここでは、宿屋の娘、ヴェラが第一幕で虚無主義者として登場することを暗示し、劇の第一の展開を起している。第一幕の終りでは、アレクシスが將軍と対面することで、スパイの疑惑をはらし、虚無主義者の危急の場を救うと共に、ヴェラとの新たな関係を提示している。第二幕の終りは、第一幕のミカエルの台詞「忘れたんですか、一階です。だから十分狙撃出来ますよ」の結末をつけ、皇帝の死で幕となっている。前にも述べたごとく、皇帝の死は当然、アレクシスが新しい皇帝となることを暗示し、パウル・マラロフスキイの追放なども必然的に起ることを示している。これが第三幕、第四幕への導火線となっていることは言うまでもない。第三幕は舞台中央でのヴェラの長台詞で終るが、序幕の時と同じように観客に向けての復讐の誓いで幕となる。この復讐の誓いも第四幕で、ヴェラの心変りを生み、新たなアクセントをつけることになる。第四幕は、ヒロインであるヴェラが恋する男、アレクシスとロシアを救うために命を絶って幕となる。このように見てくると、作者、ワイルドは幕の降ろし方によって、劇全体の起承転結を計っていることがわかる。また、幕の降ろし方にも、序幕、第三幕のように、観客に向っ

て、毅然と、或は、詠嘆的に台詞を吐いて幕となる場合と、その他の幕のように事件が起って幕となる場合とに分れている。いずれの場合でも、それぞれ変化を持たし、次の幕への期待感を持たせる配慮が感じられる。

(5)

ワイルドの芝居作りを今迄検討して来た訳だが、振り返って見ると、初めて劇を書いた作家としては芝居作りを理解しているように思う。この「ヴェラ、或は虚無主義者達」という芝居では彼本来の才能が十二分に発揮できずに終わった嫌いはあるが、それは彼の劇作術が未完成なことから生ずる未熟さのせいである。しかし、個々の技法を考えると、サンジュアンが述べているように、急激な運命の転回、説得力のある幕、主役の心の変化や急激な改宗、敵役の当意即妙な言い回し、巧妙な逆説などに作者の面目躍如たるものが表れている。この劇が当時当らなかったのは、作者が当時の人々に迎合して虚無主義者という時事的な話題を取り上げた点に原因があったように思えるし、その後現在に至るまであまり持て囃されることもなく来ているのは、彼自身の持ち味が生かし切れないテーマを選んだこと、彼自身が本当に心から書きたかった作品だったのかという疑問を抱かせる点にあるように思える。

Notes

- (1) オスカー・ワイルドの生涯 平井博著 松柏社 p.100 参照
- (2) Oscar Wilde E. H. Mikhail The Macmillan Press Ltd. p.190 参照
- (3) The Plays of Oscar Wilde ALAN BIRD Vision p.24 参照
- (4) Ibid pp.14—15 参照
- (5) THE ART OF OSCAR WILDE SAN JUAN Princeton p.133 参照
- (6) World Drama ALLARDYCE NICOLL HARRAP p.638 参照

Text

Complete Plays by Oscar Wilde Collins Classics 参考書目

- (1) オスカー・ワイルドの生涯 平井博著 松柏社 昭和50年
- (2) Oscar Wilde Sheridan Morley Holt, Rinehart and Winston 1976
- (3) Oscar Wilde Louis Kronenberger Little, Brown 1976
- (4) Oscar Wilde The Critical Heritage Edited by Karl Beckson Routledge

- & Kegan Paul, 1970
- (5) Oscar Wilde Art & Egotism Rodney Shewan The Macmillan Press Ltd 1977
 - (6) Oscar Wilde Vol. One, Vol. Two Edited by E.H. Mikhail The Macmillan Press Ltd, 1979
 - (7) The Moral Vision of Oscar Wilde Philp K. Cohen Fairleigh Dickinson University Press 1978
 - (8) Oscar Wilde Philippe Jullian Constable 1969
 - (9) The Life of Oscar Wilde Hesketh Pearson Macdonald And Jane's 1975
 - (10) Oscar Wilde Michael Hardwick Osprey 1973
 - (11) The Plays of Oscar Wilde Alan Bird Vision 1977
 - (12) Oscar Wilde An Annotated Bibliography of Criticism E.H. Mikhail The Macmillan Press Ltd. 1978
 - (13) The Art of Oscar Wilde San Juan Princeton Univ. Press 1967
 - (14) Oscar Wilde Edonard Roditi New Directions Books 1974
 - (15) Oscar Wilde Edited by Richard Ellmann Prentice-Hall International, Inc. 1969
 - (17) Satire in the Comedies of Congreve, Sheridan, Wilde, and Coward Rose Snider Phaeton Press 1972
 - (18) World Drama Allardyce Nicoll Harrap 1976